

イネばか苗病の種子消毒法

農業研究センター 農産園芸研究所 病虫部

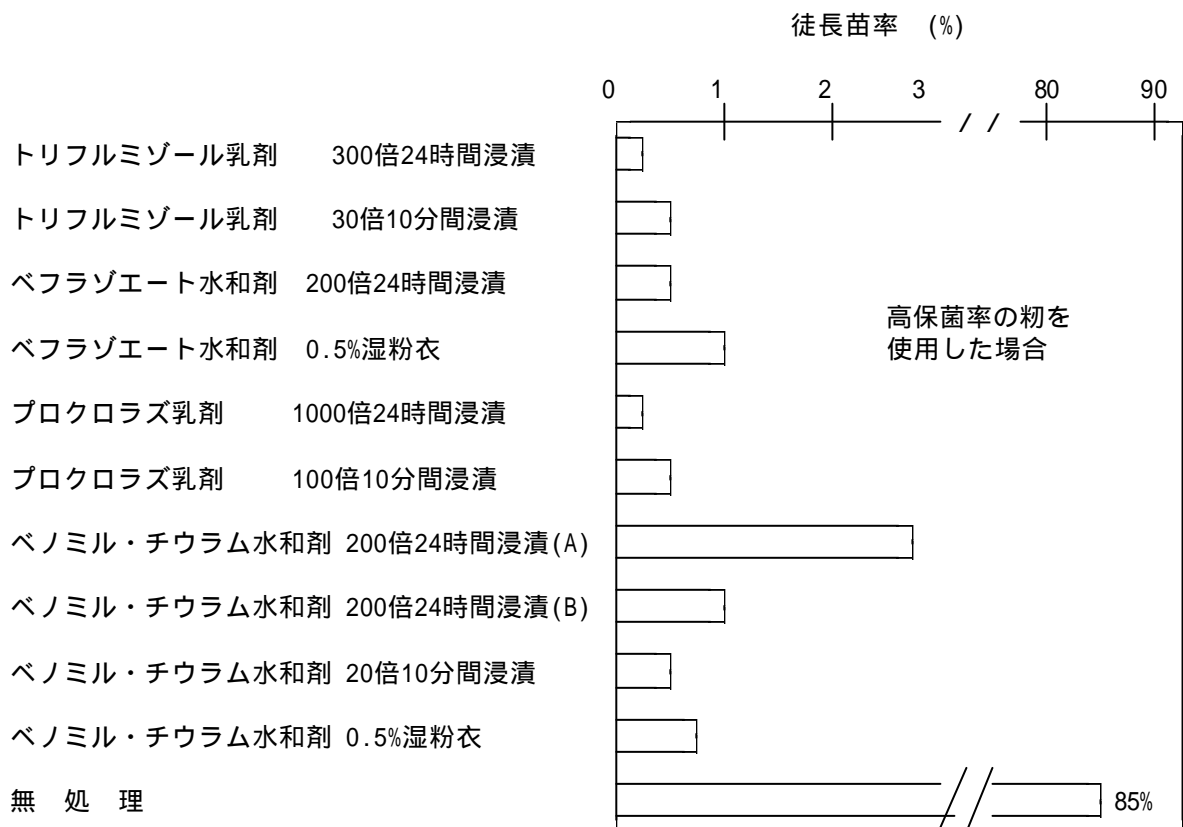
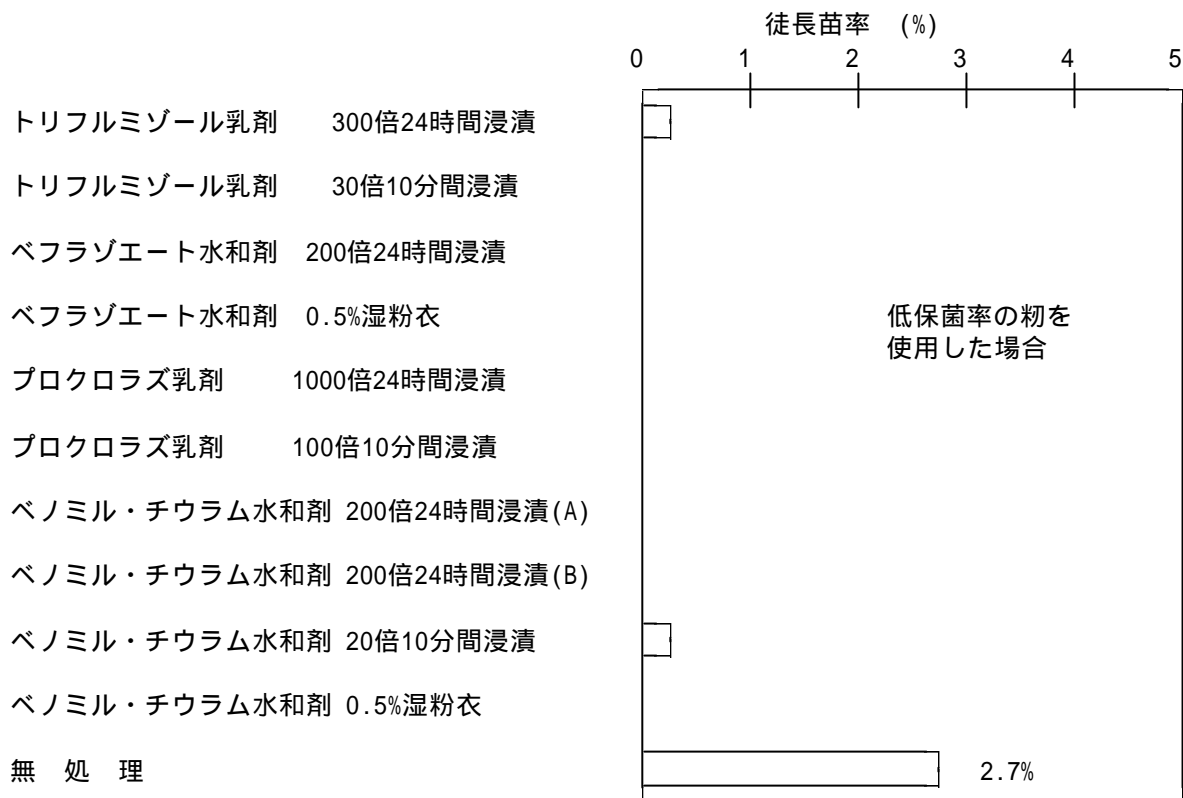
研究のねらい

イネばか苗病は、古くから発生している病害で、種子消毒以外に防除対策がない。

近年、本病菌のベノミル剤に対する耐性菌の出現が全国的に問題となり、また、従来の薬剤の効力低下が言われているため、新しく開発された薬剤を使用して、その効果及び使用方法について検討を行った。

研究の成果

1. 県内におけるイネばか苗病菌は、調査した範囲内では、ほとんどベノミル感性菌であった。
2. 近年、新しい種子消毒剤として開発されたトリフルミゾール剤、ペフラゾエート剤及び、プロクロラズ剤は、ベノミル耐性菌に高い防除効果を持っている。これらの薬剤及び従来からのベノミル・チウラム剤は、低保菌率の籾を使用した場合には高い防除効果を持っている。
3. しかし、高保菌率の籾を使用した場合には、ベノミル感性菌であっても、完全な防除効果は期待できない。本病を完全に抑制するためには、種子更新を行い、さらに種子消毒を実施する必要がある。
4. ベノミル・チウラム剤は、ベノミル感性菌に対しては、消毒方法をしっかり守れば、新しい薬剤とほぼ同等の効果を持っている。
5. 使用上の留意点
 - (1) 新しい薬剤では、育苗初期に草丈の抑制が認められるが、後半には回復してくるので、実用上は問題ないと思われる。
 - (2) また、これらの薬剤は、ばか苗病に対しては高い防除効果を持つが、いもち病心枯線虫等の種子伝染性病害虫に対する効果が不安定のため、他剤との混用が必要となる。特に、パダン剤との混用では薬害の恐れがあるため、パダン剤の濃度は、1,500倍程度で使用するのが望ましい。



注) (A):風乾なし (B):24時間風乾

図 ばか苗病に対する各種薬剤の種子消毒効果